

## 1. はじめに

平成 29 年 3 月 31 日「<sup>ごぼうやま</sup>午王山遺跡発掘調査出土の弥生時代遺物」が和光市指定文化財となったことを記念して平成 29 年 9 月 23 日から 28 日にかけて「午王山遺跡 弥生時代の落とし物」と題する展示会を開催した（図 2）。延べ 947 人の方が来場し、広く市民の方々にお披露目することができた。

展示会にご来場した方より、父が生前もらった午王山の土器が自宅にあり、このまま保管していると、今後代替わりで捨てられてしまう可能性もあるので、和光市役所に寄附したいとお話をいただいた。

聞き取り調査等を行い、文化財資料として寄贈を受けた。本稿は、寄贈された土器を収蔵資料とするため、経緯の聴取や実測、観察を行い記録化をすることが目的である。

## 2. 聞き取り調査

寄贈された土器には、<sup>かきつけ</sup>書付（図 3）があり、それとともに聞き取り調査を行い、当時の状況把握を行った。

寄贈者によると「生前父が埼玉病院の裏の畑を散歩していた時、農家の方が井戸端で土器を洗っていた。話を聞いてみると、その方の子どもが畑で拾ったものであった。珍しいものであり、その土器が壊れてなく、形が綺麗であったことから、持っていたタバコと交換してもらった。そして、大事に今日まで保管していた。」とのことであった。

## 3. <sup>ごぼうやま</sup>午王山遺跡と<sup>ごぼう</sup>牛房遺跡

寄贈者は午王山遺跡の出土品と考えていたが、書付には「埼玉県和光市牛房」と書かれている。では、どこの遺跡で出土したものだろうか。ここで、書付にある「牛房」という地名から推定され

る 2 つの遺跡「午王山遺跡」と「牛房遺跡」について述べていきたい。

午王山遺跡は、和光市新倉 3 丁目 2829 ～ 2834 番地にかけて位置（図 4）しており、独立した丘の上に立地している。現在は「午王山」と表しているが、新編武蔵國風土記<sup>1</sup>には「牛房山」と記されている。15 回行われた午王山遺跡の発掘調査で、旧石器時代から中世までの複合遺跡であることが判明している。遺跡の中心となる弥生時代の遺構・遺物が多数検出され、遺跡の一部分は史跡として市指定文化財に指定されている。

一方で牛房遺跡は、和光市諏訪 2-1 国立埼玉病院や諏訪原団地の南側にあり、南 1 丁目 2386 ～ 2391 番地にかけて位置（図 5）している。遺跡は白子側左岸南向きの台地平坦部であり、標高 38 ～ 39 m を測る<sup>2</sup>。牛房遺跡の発掘調査歴はいまだない。

寄贈者はこの土器を午王山遺跡から出土したものと考えていたが、当教育委員会では、書付に記されている「牛房（国立埼玉病院裏の畑）」と遺跡の位置関係から牛房遺跡（図 6）で出土したものと推定した。

寄贈者には、午王山遺跡ではなく、牛房遺跡で出土した土器と考えられる旨を説明し、平成 29 年 9 月 23 日、文化財資料として寄贈を受けた。



図 1 寄贈された土器

# ごぼうやま 午王山遺跡 弥生時代の落とし物

和光市指定文化財記念特別展

発掘の遺物は  
落とし物なんだね

すてきな  
落とし物ね



©和光市

遺失物法に基づいて、埋蔵文化財(出土品)は落とし物として取り扱われ、警察署に「埋蔵物発見届」を提出し、警察署から所有の認定を受けています。

## 展示品

- 新規指定文化財 107 点
- 午王山出土板碑 など



和光市午王山遺跡発掘調査出土の弥生遺物が指定文化財となったことを受け、指定された遺物 107 点を展示すると共に、午王山遺跡について再認識の機会とします。

平成 29 年(2017 年) **9 月 23 日(土) ~ 9 月 28 日(木)**  
和光市民文化センター 企画展示ホール

開場時間 ■ 午前 9:00 ~ 午後 5:00

入 場 料 ■ 無料

主 催 ■ 和光市教育委員会

後 援 ■ 公益財団法人和光市文化振興公社

お問合せ ■ 和光市教育委員会生涯学習課文化財担当 TEL048-424-9119



埼玉県和光市広沢 1-5

図 2 展示会ポスター



図 2-2 展示会の様子

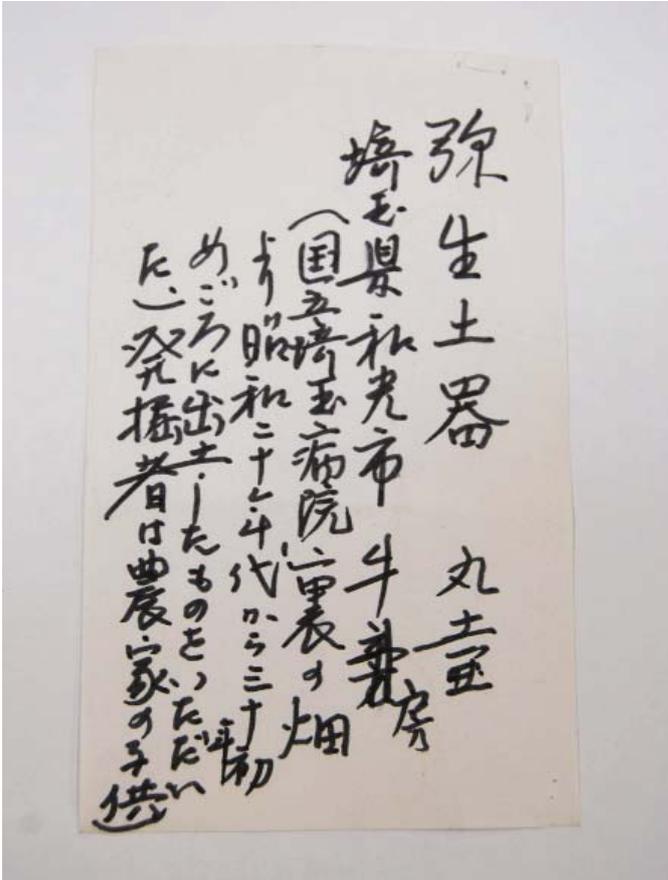


図 3 書付

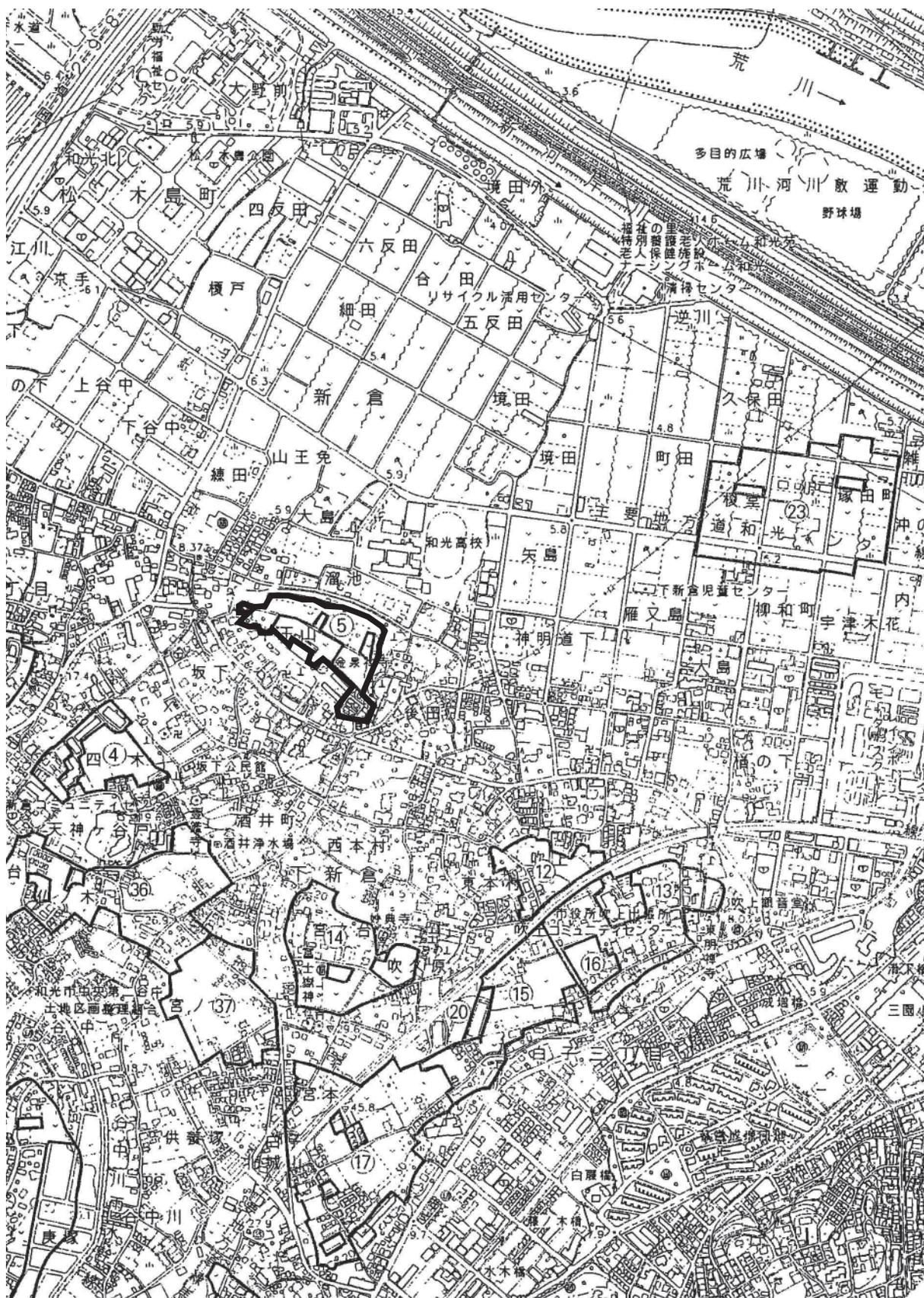
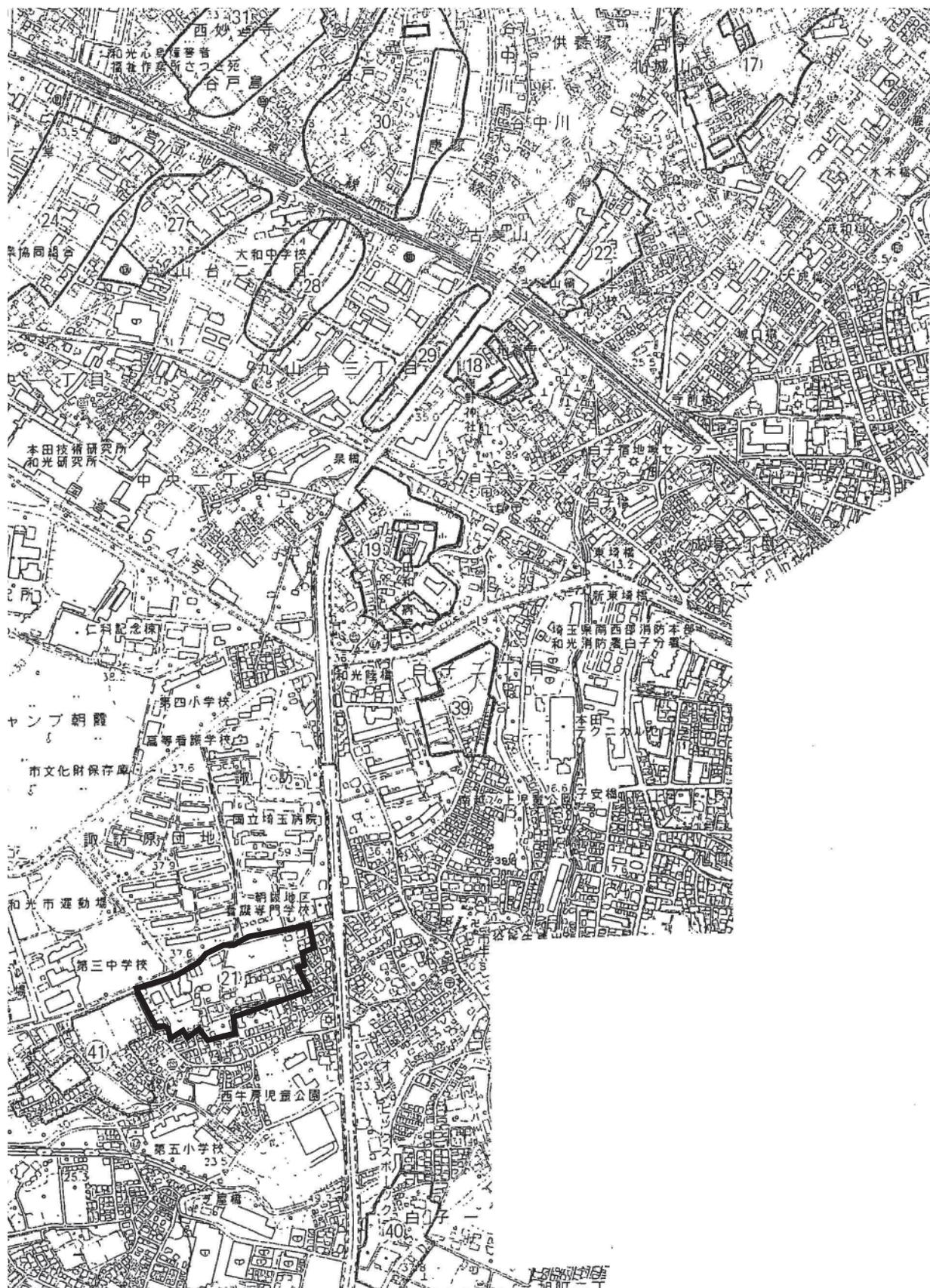


図4 ⑤午王山遺跡 位置図



S=1/10000

図5 ②1牛房遺跡 位置図(全体)



図6 牛房遺跡位置図

#### 4. 土器観察

図7の土器が寄贈された土器である。口縁部が欠損しているが、頸部から胴部まで完形に近い土器である。

法量は、残存高 14.5cm 胴部最大径 14.7cm 底径 4.2cm を測る。器形は、胴部は球形に近く胴部下方でゆるくすぼまる。頸部は強く屈曲し、頸部直上の口縁は丸味をもって立ち上がっている。

器面調整は、全体的にハケ目調整後丁寧なヘラミガキが全体に施されている。

ヘラミガキの方向は、口縁部は横方向ヘラミガキ。頸部は縦方向ヘラミガキ。胴部上半はななめ方向ヘラミガキ。胴部下半は横方向から縦方向ヘラミガキが施されている。

色調は、明黄褐色 2.5Y6/6<sup>3</sup> である。

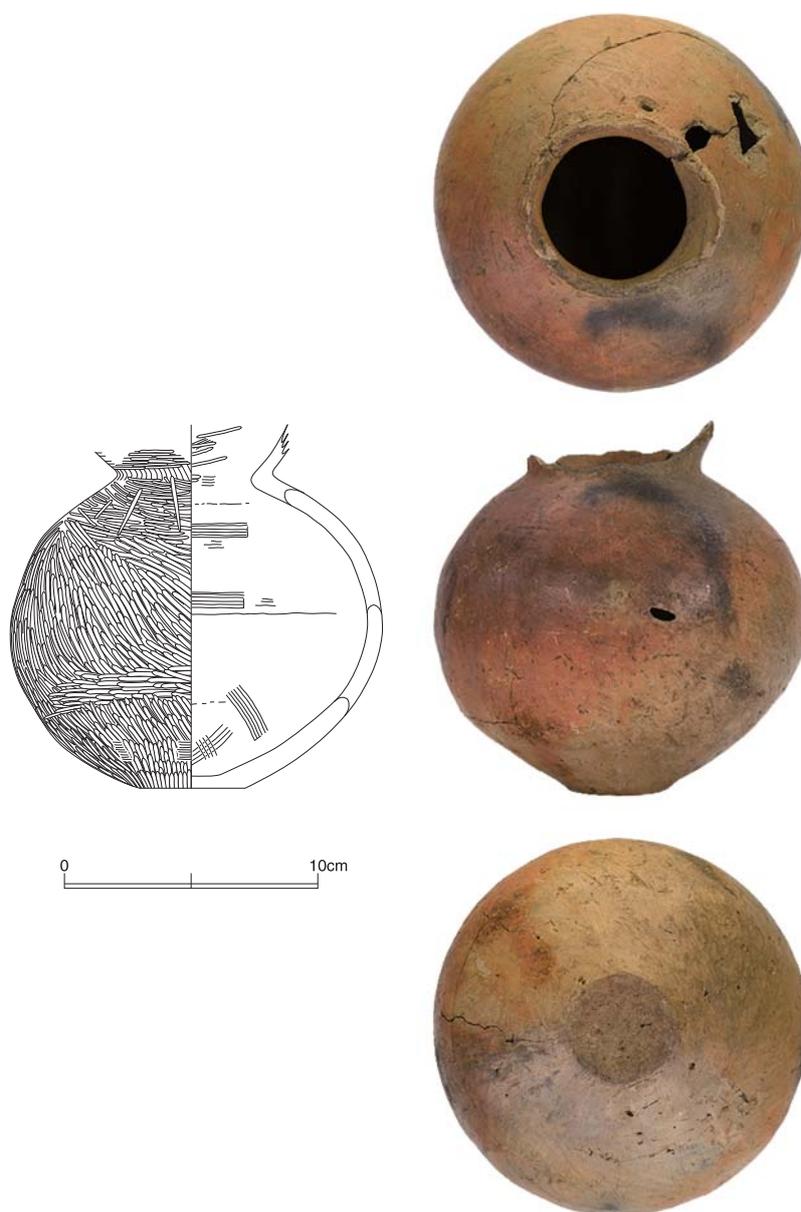


図7 実測図

## 5. まとめ

寄贈を受けた土器は、胴部が球形に近く底径が小さい壺形土器である。また、大き目の<sup>かんがた</sup>埴形土器とも言える。

やすい あきら（和光市教育委員会）

時期は牛房遺跡の発掘調査経歴がなく定かではないが、『和光市史』での牛房遺跡表面採取資料の土器と比較検討し古墳時代前期のものと推定した。

牛房遺跡西側に隣接している南一丁目地域の越後山遺跡では7回の発掘調査が行われ、縄文時代の集落と古墳時代前期の遺構・遺物が発見されており、弥生時代の遺構・遺物は出土していないことがわかっている。

和光市内の遺跡分布状況と周辺の出土遺構・遺物状況からも、この土器は、牛房遺跡出土の古墳時代の土器と考えられる。

## 【註】

1. 間宮士信ほか 2000 『新編武蔵国風土記』 新座郡二編 (株)文献出版 p 150
2. 和光市 1981 『和光市史 史料編1 自然・原始・古代・中世・近世(地誌・紀行)』 和光市 p 440-444
3. 小山正忠ほか 2011 『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社

## 【引用・参考文献】

- 小山正忠ほか 2011 『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 間宮士信ほか 2000 『新編武蔵国風土記』 新座郡二編 (株)文献出版
- 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会 2006 『花ノ木遺跡(第7次・8次)・越後山遺跡(第3次)』 和光市埋蔵文化財調査報告書第37集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会 2013 『越後山遺跡(第2次・第6次調査)一宅地造成工事に伴う発掘調査報告書一』 和光市埋蔵文化財調査報告書第50集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 和光市教育委員会 2016 『市内遺跡発掘調査報告書